

## 【書評】

神奈川大学人文学研究所（編）

### 『「明六雑誌」とその周辺』 西洋文化の受容・思想と言語

加藤 僖 重 （獨協大学外国語学部言語文化学科教授）

「明六雑誌」は明治7年2月～8年11月まで発行された論文雑誌である。発行期間がわずか2年足らずと短く、発刊号数も全43号にすぎなかったにもかかわらず、その後の日本に大きな影響を与えた。理由は様々に考えられるが、その一つは論文の書き手の多くが、何らかの専門分野を持った欧米帰りであり、各人が積極的な意図を持って欧米の新知識普及に努力を重ねた人達であったからである。

当時、欧米を見聞してきた人は非常に希少であっただけに、大いなる抱負を持って帰国した彼らの言動がその後の日本の発展を左右したことは想像に難くない。彼らは学んできた諸分野で、これからの日本は“かくあるべき”との考えを「明六雑誌」を通じて発表した。「明六雑誌」には実に多数の論文が掲載されているが、その多くは文明開化論、国語問題、婦人問題、政治問題、経済問題、法律問題、教育問題、哲学問題の論文で、それらについての啓蒙を重点とした雑誌であった。

本書は、分野を異にする7人の専門家が、「明六雑誌」に載った論文やその社会的影響を、以下のように紹介した本である。すなわち、

- 1 伊坂青司氏は、婦人問題として5回に渡って掲載された森有礼の「妻妾論」を挙げ、夫婦平等論を紹介している。森有礼のこの論文は当時の日本に大きな波紋を与えたようで、当時のオピニオンリーダーである加藤弘之、津田真道、中村正直、福沢諭吉らも意見を載せていることを、伊坂氏が紹介している。
- 2 鈴木修一氏は、新時代に即した倫理思想を打ち立てるべき必要性を説いた4回に渡って掲載された西周の「人生三宝説」を挙げた。三宝とは健康、知識、富有のことであるが、鈴木氏は、西周がこの三つの重要点を当時の日本人に向けてどう説明したか、を紹介している。なお論文末に、西周が苦心して翻訳した単語がその表記・原語・（西周の）訳語・現行の言葉にしたがって載せられている。
- 3 吉井蒼生夫氏は、西欧近代法の基礎を築いた人たちの中から箕作麟祥の活躍をとりあげている。徳川昭武の遣欧使節団に加わった麟祥はナポレオン法典の翻訳を手がけたが、その際に苦心して造作した法律用語は現在も使用されている。吉井氏は、麟祥が明六社設立・運営に関与して啓蒙活動にも積極的に参加していること、私学における法学教育にも大いに貢献したことを、紹介している。
- 4 孫安石氏の論文は他の論文と少々趣を異にしている。氏は、1862年、上海で発刊された中国人のための近代的新聞であった『上海新報』に載っている日本情報あるいは『上海新報』を直接見た高杉晋作らの日本人の反応を調べることによって、西洋の「衝撃」とそれに対する東洋の「対応」が後の「明六雑誌」ばかりでなくすでに『上海新報』もそうであったことを紹介しているのである。

5 岡嶋千幸氏の論文は、現在の我々がごく自然に使っている「ソサエター」（ソサイティ）の原語 Society を「社会」と翻訳するのに、森有礼がいかに苦勞したかを紹介したものである。なぜなら日本には「社」、「世間」、「社団」、「会社」などはあっても同質平等な個人と個人のつながりとしての「社会」はもともと存在しなかったからである。岡嶋氏はそのようなソサエターの実践の場として明六社は誕生したことを挙げ、「ソサエター」の訳語の一例として森有礼が「明六雑誌」六号と十一号で「世交」なる語を使用していることを紹介している。

6 高野繁男氏の論文は、明治期になって急速に入ってきた西洋文化を理解するために新しく造成された「和製漢語」の多くが「明六雑誌」に載っていることを紹介している。高野氏は「明六雑誌」がこうした言語情報を提供してくれる第一等資料であることを示唆し、併せて載っている和製漢語の具体例を分野別に究明している。

7 浅山氏は、明治になって急速に変化した国語表現法を、「明六雑誌」に載っている西周、津田真道、森有礼の 11 論文を材料に、使用されている助詞の性格を文法的に 23 通りに分け、古典中国語とも関連させて説明している。氏は比較のため、対象資料として「明六雑誌」以前の文（近世和文）に本居宣長の『玉くしげ』、富永仲基の『翁の文』、山科道安の『槐記』を、さらに現代文資料として「明六雑誌」で扱った論文と類似分野について記している朝日新聞の 13 社説を選んで比較検討をしている。

高野氏、浅山氏の手法は自然系論文ではよく見られる手法であるとは云え、この分野では注目すべき手法であろう。

明治期の先人達が西洋文明を移入するのに如何に努力をしたかを知るために「明六雑誌」は最適な雑誌であるが、本書はその「明六雑誌」に掲載されている諸論文をどう読むべきかを示唆してくれる好著である。